パスカルの《アポロジー》のプラン復元に関して (X)

竹下春日

Sur le plan de l'≪Apologie≫ de Pascal (X)

（リ）——われわれは再び（ト）に戻り，これに後続するパスカルの叙述を検討することにしたい。その叙述は，次のようになっている——《あなたがたは，あなたがたの創造されたときの状態にはいない。／これらの二つの状態が啓示されたからには，あなたがたがそれらを認めないわけにはいかない。あなたがたの動きについて行き，あなたがた自身を観察せよ。そしてそこに，それらの二つの本性の生きたしるしを見いださないかどうかを見よ。》(La. 309-Br. 430) この文の要旨は，前に掲げられた La. 448-Br. 765 に一致している。そうしてこの断章 (La. 448) には，《相互のみなもと。……人間の本性の二つの状態。》という語が見出される。この La. 448 は 18° にぞくするから，（リ）の引用文 (La. 309) は当然 18° に結びつく（リの部分＝18°)。

（ヌ）——（リ）に続く叙述は，問答体になっている。《こんなに多くの矛盾が，単一の主体のなかに見いだされるものだろうか。》これは不信仰者の疑問を示しているが，これに対する回答は記されていない。次に，《不可解》という語が記されている。これも不信仰者の懐疑を示すものと解される。これに続いて，《すべて不可解なものは，それでも依然として存在する。無限の数。有限に等しい無限の空間。》という叙述が見られる。これはキリスト教徒側（パスカル側）の回答で，論理的には《不可解》であっても，それだからと言って，この不可解の対象となっている内容物が存在しないことにはならない，ということを意味しているとおもわれる。そうして不可解であるにもかかわらず，存在するものの例として，《無限の数。有限に等しい無限の空間。》が挙

げられていると，見做される。さて次に出てくる文章は，《神がわれわれに結びつくなどということは信じられない。》というものであるが，これは言うまでもなく不信仰者の言葉である。そして《そのような考えは，われわれの卑しさを見ることだけによって引き出されるものである。》以下の長文は，この言葉に対する反論にほかならない。

以上（ヌ）全体を概観するとき，これが 18°《宗教の基礎と反論への回答》に相当すること，特に後半の《反論への回答》に相当することは，疑いも無く明らかである。すなわち（ヌ）＝18°。

（ル）——（ヌ）の後に続く La. 309 の叙述は，再び擬人法による神の言葉である。その要点は，次の個処に存在する——《……そして，これらの相反するものを調和させるためには，私は，私のうちにある神性のしるしを，説得力のある証拠によってあなたがたにはっきり見せようと思っているのである。それらの神性のしるしは，私が何であるかをあなたがたに納得させ，そして，あなたがたが拒むことのできない不思議や証拠によって，私に権威を与えるであろう。》この文中における《説得力のある証拠》des preuves convaincantes および《あなたがたが拒むことのできない不思議や証拠》des merveilles et des preuves que vous ne puissiez refuser は，文意の上から言って重要なる意義をもつものであるが，これらはすべて 18° 中に見出しうるものである。すなわち，La. 447-Br. 705 の《証拠。預言とその成就。……》および La. 434-Br. 223 の《復活》や《処女降誕》などが，それである。したがって（ル）の部分も，18° の《反論への回答》に対応的関係を持つと言いうるのである（ルの部分＝18°）。

（ヲ）——（ル）に続く叙述は，11° の最後の部分を構成するものであるが，その叙するところは《隠れた神》を核心とするものであって，われわれは矢張り同じものを，18° 中に発見するのである——《神がみずからを隠そうとされたこと。……神はこのように隠れているので，神が隠れていることを説かない宗教は，すべて真ではない。またその理由を明らかにしない宗教も，すべて有益ではない。われわれの宗教は，それらをことごとく果たしている。＜まことにあなたは隠れている神である＞》(La. 449 Br. 585)。それゆえ（ヲ）の部

分＝18° を，われわれは確定しうるのである。

以上 11° 章全体すなわち La. 309 の全叙述を検討考察した結果，われわれは次の成果を獲たのである。La. 309 の（ロ）の部分＝10°（等符号は対応一致を示す。以下同様）。（ハ）の部分＝16°。（ニ）の部分 ＝9°。9° → 16°（ホによる）。（ヘ）の部分＝18°。（ト）の部分＝18°。17°→18°（チによる）。（リ）の部分＝18°。（ヌ）の部分＝18°。（ル）の部分＝18°。（ヲ）の部分＝18°。

ところで 11° 章は，前述のごとく《アポロジー》のプランの《第二部》の大まかな概要であることが，以上において立証されたのであるが[9]，われわれはこれによって，若干の章の順序を推知決定しうるのである。つまり，11° 章における各部分の順序が即ち，この各部分に対応する各章の順序であると，言いうる——(ロ)→(ハ)であるから 10°→16° であり，次に（ニ)→(ハ）であるから 9°→16° である。また（ニ）→（ヘ・ト・リ・ヌ・ル・ヲ）であるから，9°→18° となる。しかし（チ）の論証により，17° は 18° から分離独立して 18° の直前に来ることが明らかにされたのであるから，17°→18° であり，9°→18° と綜合すると，9°→17°→18° となる[10]。したがって（ロ）の部分以下（すなわち 10° 以下）の順序を整理すると，次のごとくである——10°→9°→16°→17°→18°。

（六）18°《宗教の基礎と反論への回答》と13°《理性の服従と利用》について——（イ）18° と 13° の関連性については，既に（四）の（チ）において述べられている（関係図参照）。ところで 13° は，パスカルのいわゆる《宗教の証拠》preuves de la religion (19°～26°)[11]にも関連を持っている。例えば，この宗教の証拠中の主なるものに属する 23°《イエス・キリストの証し》の諸断章には，次の叙述が見出される——《奇跡の組み合わせ。》(La. 579-Br. 809)，《彼のひそかな復活》(La. 585-Br. 793)，《これらの十二人のものが，イエス・キリストの死後集まって，彼は復活したと言いふらす策略をめぐらしたとする。……》(La. 587-Br. 801)，《マホメットのしたことは，だれにでもできる。彼は奇跡も行わなかったし，預言もされなかったのだから。だが，イエス・キリストのされたことは，だれにでもできない。》(La. 598-Br. 600)，《使徒たちは，欺かれたか，欺いたか，どちらかであるというのは，支持しが

たい。なぜなら，ある人が復活したなどと思うのは，不可能なことであるから。イエス・キリストは使徒たちとともにおられたあいだは，彼らをささえることができた。だが，その後，もし彼が彼らに現われなかったとしたら，だれが彼らを動かしたであろうか。》(La. 598-Br. 802)これら《奇跡》miracles や《復活》résurrection にかんする叙述は，しかし 13° の La. 365-Br. 838 にも見られるところである——《イエス・キリストは奇跡を行われた。……メシアが死に，復活し，そして諸国民を回心させるまでは，預言はすべて成就したとはいえなかった。そこで，この時間のあいだは奇跡の必要があったのだ。今やユダヤ人に対してその必要はない。成就した預言は一つの永続的な奇跡だからである。》かように23° と 13° は緊密な対応点を持っている。しかのみならず，La. 365 の末尾に記された《奇跡》としての《成就した預言》les prophéties accomplies は，24°《預言》とまさに一致するものであり，そうしてこの成就した預言としての《永続的な奇跡》un miracle subsistant も，その永続性の点で，まさしく 21°《永続性》perpétuité と照応的連関を持つのである。したがってわれわれは，13°＝21°，13°＝23°，13°＝24° を確定しうるのであるが，これら 21°・23°・24° はすべて《宗教の証拠》の重要部分を構成するがゆえに，必然的に 13° と《宗教の証拠》全体（19°～26°）との連関を推定しうるのである（13°＝19°～26°）。

（ロ）——（イ）において，われわれは 13°《理性の服従と利用》の章が，一方において 18°《宗教の基礎と反論への回答》と関連し，他方において《宗教の証拠》すなわち 19° より 26° にいたる章群とつながりを保持していることの事実を，発見した。われわれはこの事実の意味するところないし由来するところを，次に探究して行きたい。（a）——《アポロジー》の第二部にかんするパスカルの構想を洞察するとき，その最大のポイントが神の証明にあることは，確かである。それは《第二部序言。》なる見出しをもつ La. 49-Br. 242 の主旨である——《この問題を論じた人たちについて話すこと。これらの人たちが，神についていかに大胆に語ろうとするかに私は感心する。不信者に議論を向けながら，彼らの第一章は，自然界の被造物によって神を証明しようとするのである。……この重大な問題の証拠のすべてとして，月や遊星の運行を与え

たり，こんな議論でその証明を完了したと自認するのは，われわれの宗教の証拠が実に薄弱であると思わせる根拠を与えることになるのである。》文中におけるごとく，神の証明の問題こそはパスカルにとって，《重大な問題》grand et important sujet なのである。この問題の重要さは，14°《この神の証明法の卓越性》Excellence de cette manière de prouver Dieu なる一章が特に設けられていることによっても，われわれはこれを知りうるのである。それではパスカルは，いかにして神を証明しようとしたであろうか。

（b）——La. 380-Br. 547（14°）は，次のように説いている，《イエス・キリストによる神。われわれはイエス・キリストによってのみ神を知る。この仲保者がなければ，神との交わりはすべて取り去られる。イエス・キリストによって，われわれは神を知る。イエス・キリストなしに神を知り神を証明すると主張した人々は，無力な証拠を持っていたにすぎない。しかし，イエス・キリストを証明するものとして，われわれは預言を持っている。それは確実明白な証拠である。これらの預言は成就され，事実によってその真であることを立証したのであるから，これらの真理の確かさを，したがってイエス・キリストの神性の証拠を示している。……なくてはならない仲保者なしに，人は神を絶対的に証明することも，正しい教理と正しい道徳とを教えることもできない。けれども，イエス・キリストにより，イエス・キリストにおいて，人は神を証明し，道徳と教理とを教える。》この断章によって，われわれはイエス・キリストによってのみ神を証明しうること，そうしてイエス・キリストを証明するものは成就された預言であること，斯くパスカルがえ考ていたことを知るのである。それでは成就した預言とは，いかなる性質のものであろうか。パスカルによれば，《成就した預言は一つの永続的な奇跡》（La. 365-Br. 838）である。そうしてかかる奇跡こそは，《超自然的》なるものである，なぜなら《恩恵，奇跡。どちらも超自然的。》（La. 470-Br. 805）だからである。ところでキリスト教はこの超自然的なるものを認めるものであり，したがってパスカルは，《理性》に対して超自然的なるものの承認——理性の自己否定を要求するのである。彼によれば，《このような理性の否認ほど，理性にふさわしいことはない。》（La. 367-Br. 267）のである。《理性の最後の歩みは，理性を超えるも

のが無限にあるということを認めることにある。……自然的な事物が理性を超えているならば，超自然的事物については，なんと言ったらいいのだろう。》(La. 373-Br. 267) かようにパスカルは，——《真のキリスト教》le vrai christianisme の立場に立って——理性が自己を超えたものがあることを認めるというしかたで，理性の服従を要求し，ここに本来的理性のありかたを観たのである——《理性の服従と行使，そこに真のキリスト教がある。》(La. 352-Br. 269)茲においてわれわれは，畢竟神の証明のために，《理性の服従と利用》なる章が設けられたことを，知るのである。

（c）——扨て《神の証明》prouver Dieu は，それが論証にかんする以上《理性》raison のはたらきに依存する。このかぎり人は，理性を利用しなければならない。パスカルが《理性の服従と利用 usage》の章を設けた所以である。以上によってわれわれは，13° 章が究極において，《宗教の証拠》の核心なる《神の証明》のためにあることを，容易に理解しえよう。

（d）——しかしこの章 (13°) の設けられた理由は，これに留まらない。われわれは既に 18°《宗教の基礎と反論への回答》中に，《復活》および《処女降誕》が語られているのを見て来た（四のチ）が，同章中にはなお，次のごとき超自然的なるものが見出されるのである——《預言とその成就。》(La. 447-Br. 705)，《隠れた神》(La. 449-Br. 585)。かようにパスカルは，18° 章において《超自然的なもの》を述べているのであるが，これは当時のいわゆる「自由思想家」libertins の無神論的批判を意識したものであることは，明らかである（復活や処女降誕を弁護している前出の La. 434-Br. 223 は，その好例である)。パスカルはかかる理性によっては理解しがたい事象を個々に弁護するのみならず，この弁護の前後の段階において，これらを《超自然的なるもの》として包括的一般的に考察して，これを正当化しているが，このことが彼にとって《宗教の基礎と反論への回答》の充実強化を意味するものであることは，われわれにとって容易に理解しうるところであろう。かかる意味において，超自然的なものの肯定と理性的認識との関係が，彼に《理性の服従と利用》の章を必要ならしめたのである。

以上（a）・（b）・（c）・（d）により，われわれは 13° こそは，18° と《宗教

の証拠》(19°～26°）との不可欠なる補強物たることを，知るのである。

註

（9） われわれは（ル）の論証において，11°（La. 309）の（ル）の部分が La. 447 の≪証拠≫preuve と対応することを示したのであるが，（ル）の部分中の≪証拠≫des preuves は La. 447 のみに対応するのではなく，広く≪宗教の証拠≫（第二部の後半）を指しているのである。なぜなら，La. 447 の証拠とは，内容上成就した預言のみを指すのであるが，（ル）の証拠なるものは，神の眼から見て≪神性のしるし≫ des marques divines に役立つものを意味しており，そうしてこれに役立つものは成就した預言に限らないからである（前者が preuve と単数形であり，後者が des preuves と複数形で書かれているのも，この故とおもわれる)。かように 11° 章は≪第二部≫の前半のみならず後半をも含む意味において，われわれは，この章を≪第二部≫の概要と称したのである。

(10) 9°→17° の連続性について，簡単に説明しておきたい。9°≪哲学者たち≫の主旨は，哲学者たちの言に従っても，人々は幸福になれないというにある。万人が幸福になりうる道は，ただキリスト教の信仰に入ることのみにある，というのがパスカルの言わんとするところであるから，9° の次に 17°≪愛すべき宗教≫（キリスト教）が続くのは，極めて自然であると言いうる。

(11) ≪preuves de la religion≫なる語は，La. 38-Br. 290 の見出として使われている。なお宗教の証拠にかんしては，拙論（V）を参照のこと。（Xの註了）